

第四部 ◆ 心の模様

身心変容における陶酔と覚醒

津城寛文

筑波大学大学院人文社会科学研究所教授／比較宗教学・神道行法研究

はじめに

この「身心変容技法」の研究会で扱われている多様な実践で起こっていることを、陶酔／覚醒という対語で色分けすると、時間的、段階的、次元的な変化が浮き彫りになり、特徴が際立つのではないかと、思いついた。

たとえば、よく知られた『ヨーガ・スートラ』の八支則のうち、後半の四つ、プラティヤハハラ（制感）、ダーラナー（凝念）、ディヤーナ（静慮）、サマデーイ（三昧）も、陶酔／覚醒という視点からは、どれにも二つの成分が含まれ、互いに衝突したり交替したり、あるいは浸透したり相乗したりして、段階的、ラセン的、反復的に説かれている。そのように、身心変容の体験は、通常の意識では陶酔しつつ、高次の意識は覚醒している、というふうな、複数の意識層で、陶酔／覚醒が並行しているとも考えられて

いるようである。

1 永遠の哲学・宗教のプロジェクト

日常という出発点から究極の到達点（があるとして）までを説く、いわゆる「永遠の哲学」を読み直して、身心の変容に、陶酔／覚醒がどうかからんでいるか、考えてみたい。まず現代における「永遠の哲学」の代弁者の一人、ケン・ウィルバーは、初期の『アートマン・プロジェクト』で、「心的成長はアートマンを目指す」と述べていた。また中期の『統合心理学への道』では、永遠の哲学のポイントは「大文字のスピリット」が「すべての発達と進化の到達点であると同時に、そのすべての基盤」という超越と内在のパラドックスにあり、基盤から到達点に至るのが「永遠の哲学のプロジェクト」であると述べていた。宗教を水平的／垂直的に大別したウィルバ

ーにおいて、「永遠の哲学・宗教」にかかわるのは、垂直的な宗教であり、その「質的な深度」は、真理性（本格的性）(authenticity)で測られた。瞑想実践者としてのウィルバーが、技法とともに説いているところは、「永遠の宗教のプロジェクト」と呼ぶにふさわしい。ウィルバーに即して、垂直的宗教の理想的なプロセスと、そこからの逸脱を描き分けることは、多少とも行なったので、今回はやや古い、オルダス・ハクスリーにさかのぼって、そこで強調されていることと、あまり追及されていないことを、読み分けてみたい。

ハクスリーの『永遠の哲学』は、古今東西の瞑想や祈りの達人たちの証言を編集、解説したアンソロジーであり、諸宗教の原典に当たる能力のない者に、「全世界の各宗教に共通する最高の因子」の見取り図を提供しようとしたテキストである。ハクスリーは冒頭で、あらゆる存在に内在するとともにそれを超越している「根拠」、「神的な『現実』」があり、人間

はそれを知ることができる、というのが「永遠の哲学」の最大公約数だと定式化し、それをリアルに知ることを「合一(的)知 (unitive knowledge)」と呼んだ。

用語について、邦訳では、translatonに変身・革命・改造・変形・変貌などの訳語が当てられ、類語として、変革・修正(modification)、変身(transfiguration)、改革(amelioration)、などが多用されており、「変容」の訳語はないが、一〇年ほどのちの『知覚の扉』では、transformationとその訳語「変容」がキーワードになっている。ハクスリーを身心変容論として読むことは、的外れではない。

ハクスリーの特徴は、「終極の境地に到達するための……具体的な方法はあまり述べられていない」という解説どおり、出発点と到達点との間をつなぐ「技法」にはあまり関心が示されないことである。『知覚の扉』では、それをメスカリンという薬物がつないでいる。じつさい、「魂が『実在』との合一知に達する」のは、「像を抱かずに行なう(imagines) 観照」によってであり、「シンボルが少ないほどいい」というように、ハクスリーはシンボリズムの活用を含む技法一般、多彩なプロセスを重視しない。他方、「神を包括的に知ろう……世界内においても実感しようとするのであれば、誘惑や気散じは避けてはならず、……進歩のための機会として……神聖な活動となるようにそれを変形することが望ましい」というように、日常は重視する。

2 それぞれに固有の危険

目的地に至るには、さまざまな道がある。カトリ

ックでは、「活動」と「観照」が大別され、ヒンドゥー教では、「仕事の道」「知識の道」「信仰の道」が説かれた。二つにせよ三つにせよ、「道徳上の行動と霊知との関係はいわば円環状で、相互作用的」、かつその「循環過程が際限なく続く」とあるとおり、「これは相乗的である。そしてどの道を辿るにせよ、「精神または霊の辿る道は、両側に深淵が口を開いている……片側には単なる棄却と逃避の……反対側には……受け容れて享受するだけ」という、それぞれに固有の危険が伴う。これは「霊的暴力」という主題にはかならず、以下は、そのハクスリーなりの整理である。

2-1 信仰・知識

そのままですでに救われている、すでに神的な根拠と一つである、したがって何もしなくてよい、さらには何でも好きなことをしてよい、という、「永遠の哲学」の異端思想や、信仰さえあれば道徳律に従う必要はない、とする信仰至上主義(antimoralism)が、古今東西に散在している。これらの立場は、なぜ苦行や瞑想、信仰や儀礼が必要かという問いには、答えない。

霊的意識のレベルではすでに、「私たちは神の『根拠』というものに対する合一的な知識を有している……その知識そのものでもある」とあえて主張するには、かなりのレベルに達していることが求められる。「万物は神で、神は万物である」という単に知的な、実感されていない理論を……実際に応用するとどういう結果になるか……悲惨な結果……陰惨な話が私たちに警告」しているとおりである。

また、よく知られているように、自然科学でも問われる宇宙の発生、生命の発生、意識の発生、知性

の発生といった先端科学の探究は、万物に内在しつつ超越している「根拠」という『永遠の哲学』の前半部分からヒントを得ることがある。ハクスリーも「下は原子から、上は……精神に至るまで、あらゆる個体は……絶対神の光線が、同じ絶対神の創造エネルギーの分化した被造放射物の一つと出会う点として考えることができる」と述べている。しかし、このような教えや知識を耳にしたからといって、「合一知」の体現者、表現者になるわけではない。頂点的な知識や信仰を、そのまま行動に移してよいのは、頂点的な達人のみである。

2-2 観照・瞑想

どちらかといえば高く評価されている観照や瞑想も、落とし穴に囲まれている。初歩の段階で、「最高のものではない対象に向かって一点集中的に観照を行なうのは、危険な偶像崇拜になりかねない」し、ステージが進んで「外面的」な実践が放棄され「内なる光への集中」が追及されると、「静寂主義(quietism)」や「道徳律廃棄主義(antimoralism)」に陥る危険がある。

2-3 苦行

ハクスリーは、苦行そのものは常に批判している。苦行は、「剃刀の刃を行くがごとくに危険に満ちて……片側には自己中心的な耐乏や苦行という陥穽が、他の側には何ごとも気にかかぬ寂靜の態度という危険地帯」がある。苦行者は、「傲慢……嫉妬……怒り……残酷さ……無愛」などを伴い、一般人よりも「はなはだしく悪い場合が多い」からである。そしてその根本原因は、「自己中心」的なことであり、「禁欲」「修行」で得られるのは、「解脱ではなく……いわゆ

る『心霊』能力なのである。

2-14 儀礼、組織

儀式主義の弊害については、随所で批判される。とくに「組織化された聖餐本位の宗教体系に内在する弊害」は、儀式や聖餐が、「霊力が魅惑的な心霊宇宙から肉体化された自己の宇宙へと流れ通る水路」となって、参加する人の自己拡大を促し、それによって「人を解脱の道から逸らせてしまう可能性」があること、そして何よりも「権力を僧侶階級に与える」ことである。

組織的儀式に反対するハクスリーも、そこに一定の「部分的効能」があることは認める。儀式、秘蹟、祭典は、そこで象徴化された対象が、「神的な『実在』の一面」であり、世界とその「神的な『根拠』との関係を「考えさせる」とときには、価値がある。旧約の預言者たちが口を揃えて「儀式主義に反対」していたにもかかわらず、エルサレムの神殿で儀式が執り行なわれ続けたのは、一つには、ほとんどの人が、瞑想や観照による「霊性や解脱」よりも、儀式の与える「感情的な満足」「超常能力」「部分的に救われること」を求めたこと、もう一つには、「霊性や解脱に至るうえで自分にとって最も効果のある手段は儀式」である人々がいるからである。しかしいずれにしても、こうした「儀式を重んじる過度の戒律主義」は、「永遠の哲学」においては低価値な「人格神」の観念に由来する。

ところで、組織化されない、生活の中での儀礼には、むしろ積極的な意義が認められる。「生活全体が本人によって一種の絶えまない儀式」となり、「自分の行動も聖餐」として行ない、「いかなる物体もすべて世界の永遠なる『根拠』の一象徴」と見なす、そ

のような霊的生活は、「事物が象徴で、行為が秘蹟である」ということを、意識的に想い出す」ことにつながるからである¹⁰。このように、儀式の基準も、究極の目的につながるかどうか、あるいはそれを妨げるかどうか、というところにおかれる。

2-15 自我愛

「自己」と「自我」は、区別されるときもあるが、引用文との関係で、流用されることも多い。価値が高いのは、大きく開かれた永遠の自己であり、小さく閉じられた束の間の自我ではない。終極の目的である、個別の魂と「根拠」との合一の条件は、個人の欲望を消すこと、従順であること、行為の結果に無関心であることなど、自我を去るにおかれ、信仰や儀礼、さらには瞑想や祈りも、それに添うかどうかという基準で、判定される。

神的な「根拠」を分有する生命を救い出し、「あるものに到達する」ためには、「自我中心的生命を失う」こと、「自己否定……自己滅却……自己を死なせること」が不可欠であり、「自己」を垣間見ること、「無我、無執着、無関心、単純」が必要である。あるいは、利害を離れた愛が、十分に強烈となるとき、「知は合一的な知となって無謬性を帯びる」のに対して、「偏見に捉われた自己」は部分的で歪んだ知しかもてず、「感覚的な愛」は「合一に至る道で最後の障害となるあの自我を強める」。同様に、「我意、利己心、自己中心的な考え方、願望や想像」などを消し去るのが「最良の修行」である等々が、繰り返し説かれる。

2-16 心霊的なもの

以上、ハクスリーが『永遠の哲学』で主題化し、整

理している危険を概観したが、ここからは、ハクスリーが随所で言及しながら、自覚的に主題化していないことを、あえて読みこんでみたい。

ハクスリーは、同時代における心霊研究の第一人者、ケンブリッジ大学の哲学者C・D・ブロードを参照して、「心霊的 (psychic)」といわれる現象の事実性と、そのパワーを認めた上で、その弊害に随所で説き及んでいる。儀礼、儀式、聖餐式はただの形式ではなく、そこで用いられるシンボルは、「崇拜されること」によって、一つの力の場のいくつかの中心……持続する渦巻き (vortex) ……精神的な媒体 (psychic medium) となるのであり、「心霊術に夢中になること」は、「真の霊性への道の大きな障害」になるのである¹²。

そのメカニズムについては、つぎのように、やや心霊研究に立ち入った説明が、随所に出てくる。「敬虔な信徒たちの体験する恩寵の多く」は、「憧憬および想像の(当人と他の人たちの)行為が繰り返されることによって生じた「心霊能力の渦巻き」から礼拝者にはね返ってくる人間的な恩寵」ではないか。儀式が繰り返されることで、「霊媒(心霊媒体) (psychic medium)」の心の「非人格的な下層部の枠内で、比喩的に渦巻きという形で考えてもよい何かが、独立した存在として継続しつづけ……この投射された心霊実体 (projected psychic entity) は……客観性を有し……「外に」実在」するに至るのではないか。儀式の「神聖化された演技と呪文と読経」によって、「観念または記憶が客体化されて、何らかの形で荘厳な本物の現前」を創り出し、「魔術的」な「霊力、霊験」が生じるのは、「必ずしも神から出たもの」ではなく、「先祖の信仰、献身が投射されて、いわば幽霊のように特定の場所や、経文や、演技または行為な

第四部 ◆ 心の模様

身心変容における陶酔と覚醒

津城寛文

筑波大学大学院人文社会科学研究所教授／比較宗教学・神道行法研究

はじめに

この「身心変容技法」の研究会で扱われている多様な実践で起こっていることを、陶酔／覚醒という対語で色分けすると、時間的、段階的、次元的な変化が浮き彫りになり、特徴が際立つのではないかと、思いついた。

たとえば、よく知られた『ヨーガ・スートラ』の八支則のうち、後半の四つ、プラティヤハハラ（制感）、ダーラナー（凝念）、ディヤーナ（静慮）、サマデーイ（三昧）も、陶酔／覚醒という視点からは、どれにも二つの成分が含まれ、互いに衝突したり交替したり、あるいは浸透したり相乗したりして、段階的、ラセン的、反復的に説かれている。そのように、身心変容の体験は、通常の意識では陶酔しつつ、高次の意識は覚醒している、というふうな、複数の意識層で、陶酔／覚醒が並行しているとも考えられて

いるようである。

1 永遠の哲学・宗教のプロジェクト

日常という出発点から究極の到達点（があるとして）までを説く、いわゆる「永遠の哲学」を読み直して、身心の変容に、陶酔／覚醒がどうかからんでいるか、考えてみたい。まず現代における「永遠の哲学」の代弁者の一人、ケン・ウィルバーは、初期の『アートマン・プロジェクト』で、「心的成長はアートマンを目指す」と述べていた。また中期の『統合心理学への道』では、永遠の哲学のポイントは「大文字のスピリット」が「すべての発達と進化の到達点であると同時に、そのすべての基盤」という超越と内在のパラドックスにあり、基盤から到達点に至るのが「永遠の哲学のプロジェクト」であると述べていた。宗教を水平的／垂直的に大別したウィルバ

ーにおいて、「永遠の哲学・宗教」にかかわるのは、垂直的な宗教であり、その「質的な深度」は、真理性（本格的性）(authenticity)で測られた。瞑想実践者としてのウィルバーが、技法とともに説いているところは、「永遠の宗教のプロジェクト」と呼ぶにふさわしい。ウィルバーに即して、垂直的宗教の理想的なプロセスと、そこからの逸脱を描き分けることは、多少とも行なったので、今回はやや古い、オルダス・ハクスリーにさかのぼって、そこで強調されていることと、あまり追及されていないことを、読み分けてみたい。

ハクスリーの『永遠の哲学』は、古今東西の瞑想や祈りの達人たちの証言を編集、解説したアンソロジーであり、諸宗教の原典に当たる能力のない者に、「全世界の各宗教に共通する最高の因子」の見取り図を提供しようとしたテキストである。ハクスリーは冒頭で、あらゆる存在に内在するとともにそれを超越している「根拠」、「神的な『現実』」があり、人間

はそれを知ることができる、というのが「永遠の哲学」の最大公約数だと定式化し、それをリアルに知ることを「合一(的)知 (unitive knowledge)」と呼んだ。

用語について、邦訳では、translatonに変身・革命・改造・変形・変貌などの訳語が当てられ、類語として、変革・修正(modification)、変身(transfiguration)、改革(amelioration)、などが多用されており、「変容」の訳語はないが、一〇年ほどのちの『知覚の扉』では、transformationとその訳語「変容」がキーワードになっている。ハクスリーを身心変容論として読むことは、的外れではない。

ハクスリーの特徴は、「終極の境地に到達するための……具体的な方法はあまり述べられていない」という解説どおり、出発点と到達点との間をつなぐ「技法」にはあまり関心が示されないことである。『知覚の扉』では、それをメスカリンという薬物がつないでいる。じつさい、「魂が『実在』との合一知に達する」のは、「像を抱かずに行なう(imagines) 観照」によってであり、「シンボルが少ないほどいい」というように、ハクスリーはシンボリズムの活用を含む技法一般、多彩なプロセスを重視しない。他方、「神を包括的に知ろう……世界内においても実感しようとするのであれば、誘惑や気散じは避けてはならず、……進歩のための機会として……神聖な活動となるようにそれを変形することが望ましい」というように、日常は重視する。

2 それぞれに固有の危険

目的地に至るには、さまざまな道がある。カトリ

ックでは、「活動」と「観照」が大別され、ヒンドゥー教では、「仕事の道」「知識の道」「信仰の道」が説かれた。二つにせよ三つにせよ、「道徳上の行動と霊知との関係はいわば円環状で、相互作用的」、かつその「循環過程が際限なく続く」とあるとおり、「これは相乗的である。そしてどの道を辿るにせよ、「精神または霊の辿る道は、両側に深淵が口を開いている……片側には単なる棄却と逃避の……反対側には……受け容れて享受するだけ」という、それぞれに固有の危険が伴う。これは「霊的暴力」という主題にはかならず、以下は、そのハクスリーなりの整理である。

2-1 信仰・知識

そのままですでに救われている、すでに神的な根拠と一つである、したがって何もしなくてよい、さらには何でも好きなことをしてよい、という、「永遠の哲学」の異端思想や、信仰さえあれば道徳律に従う必要はない、とする信仰至上主義(antinomianism)が、古今東西に散在している。これらの立場は、なぜ苦行や瞑想、信仰や儀礼が必要かという問いには、答えない。

霊的意識のレベルではすでに、「私たちは神の『根拠』というものに対する合一的な知識を有している……その知識そのものでもある」とあえて主張するには、かなりのレベルに達していることが求められる。「万物は神で、神は万物であるという単に知的な、実感されていない理論を……實際面に応用する」とどういう結果になるか……悲惨な結果……陰惨な話が私たちに警告」しているとおりでである。

また、よく知られているように、自然科学でも問われる宇宙の発生、生命の発生、意識の発生、知性

の発生といった先端科学の探究は、万物に内在しつつ超越している「根拠」という『永遠の哲学』の前半部分からヒントを得ることがある。ハクスリーも「下は原子から、上は……精神に至るまで、あらゆる個体は……絶対神の光線が、同じ絶対神の創造エネルギーの分化した被造放射物の一つと出会う点として考えることができる」と述べている。しかし、このような教えや知識を耳にしたからといって、「合一知」の体現者、表現者になるわけではない。頂点的な知識や信仰を、そのまま行動に移してよいのは、頂点的な達人のみである。

2-2 観照・瞑想

どちらかといえば高く評価されている観照や瞑想も、落とし穴に囲まれている。初歩の段階で、「最高のものではない対象に向かって一点集中的に観照を行なうのは、危険な偶像崇拜になりかねない」し、ステージが進んで「外面的」な実践が放棄され「内なる光への集中」が追及されると、「静寂主義(quietism)」や「道徳律廃棄主義(antinomianism)」に陥る危険がある。

2-3 苦行

ハクスリーは、苦行そのものは常に批判している。苦行は、「剃刀の刃を行くがごとくに危険に満ちて……片側には自己中心的な耐乏や苦行という陥穽が、他の側には何ごとも気にかかぬ寂静の態度という危険地帯」がある。苦行者は、「傲慢……嫉妬……怒り……残酷さ……無愛」などを伴い、一般人よりも「はなはだしく悪い場合が多い」からである。そしてその根本原因は、「自己中心」的なことであり、「禁欲」「修行」で得られるのは、「解脱ではなく……いわゆ

どと結びついて独立した心霊的存在となったもの」からの恩寵や霊力ではないか、「儀式的宗教」の多くは、「オカルト」であり「洗練された善意の白魔術」であって、「霊的な恩寵」とは限らない。それは「肉体的な修行」「苦行」から得られるものほとんどが、「解脱ではなく……いわゆる『心霊』能力」であるのと同様ではないか。¹³

こうして、儀式や苦行から発生する効果が、魔術的、オカルト的、心霊的なるものとして、「永遠の哲学」のプロジェクトから逸れたところで、世界にリアルな作用を及ぼすものとして、警戒されている。

3 陶酔と覚醒

ハクスリーの立場を、陶酔／覚醒という対語で説明しようとする、概して、覚醒に価値が置かれ、陶酔は否定される。「神に酔う」と表現されるような神秘家の陶酔には言及されず、「夢から目ざめるという喩え」を「幻の快楽などから目をさまして、永遠を意識する状態に入る過程」とするのは、端的に覚醒を評価しているし、シャンカラを引用して、「アトマン」は個人の心とその作用の「証人」であるというのも、「絶えず心を集中させておくことなしには完全な解脱もありえない」というのも、「覚醒」の強調であろう。¹⁴

3-1 陶酔の批判

陶酔については、オスカー・ワイルドやホイットマンのような芸術家は、「万物に一を視る」能力に恵まれながら、「『一』を認めるべく努力をしなかった人」たちであり、「宇宙意識」という「無償の恩寵」

「天与の贈り物」がもたらす「恍惚の喜び」をただ享受しただけ、と批判される。¹⁵

「陶酔」の危険・脅威は、つぎのように批判・警告される。「呪文」や「繰り返しごと」は、「実際に成果をあげる」が、それは「自己暗示の結果」である。「感情的宗教」「儀式的な神秘宗教」「感情喚起的な教理や修練」は、「音楽や香、荘厳な闇と神聖な光といった手段によって畏敬と美的恍惚」をもたらし、夢中になって「没頭」すると、「一点集中的な観照が神を対象としている場合」でも、その一面を除くすべての面が「萎縮」してしまう。¹⁶

なお、呪文や祭祀が「自我を魅了する」と「陶酔」めいて訳されている箇所があるが、これは ego-enhancing を ego-enchanting と読みまちがえたためである。文脈からいえば、どちらでも文意が通る誤訳ではある。¹⁷

3-2 究極に近いレベルにおける陶酔と覚醒

さて、究極に近いところ、凡人の考え及ばないレベルになると、オリジナルの名言も、浸透的、交替的、同時的、矛盾的な表現になり、ハクスリーの解説も、陶酔とも覚醒とも、どちらとも定め難くなる。したがって、このレベルを、陶酔／覚醒という対語で考えるのは、あまり生産的ではないとも思われようが、ひとまず続けて、あとでまとめて再考しよう。ブラフマンとアトマンを知り、かつ両者を意識的に区別することで、意識の大変革が起こり、「無心」の状態が出現するが、この状態を保つには、「強烈な注意（attention）」と、平静で自己否定的な受動性とを結合させることが必要である、あるいは「梵我一如という内面的な高い境地には、消滅そ

のものから消滅するという恍惚（ecstasy）」があるが、さらに「目ざめている（waking）」日常的な状態で十全に神を知る」という境地もある、とされるのは、陶酔と覚醒が高度な状態で併存、共存、交替可能である、ということだろうか。

「自分を委ねること、聖霊の導きに従順であること（obedience）」は、「夢が終わって『真理』が現われるように目を開いたままにしておくこと」と同じであるというのは、「委ねる」を強調すれば陶酔的であり、「目を開いたまま」を強調すれば陶酔的である。「事物の神性におのれを順応させる者たち」は、「子供や阿呆……：酔漢」に喩えられたり、「靈感」の「忍耐強い下僕となって、完璧な表現の自由」を得る芸術家に喩えられたりするというのは、陶酔の極に近いのではないだろうか。

瞑想と同義である祈りについては、「緊張した受け身（active passivity）」の態度で……内在すると共に超越もしている絶対神に向けてみずからを開き、ひれ伏すこと²¹などとされるのは、覚醒だろうか、陶酔だろうか、二つの混ざったものだろうか、時間的に交替するのだろうか。「一途な注意力……を長時間にわたって持続するのは難しい」ので、それはかならず「ゆるむ」が、そこを「とりとめのない夢想や空想（day-dreaming）」で満たすか、もっとまじな何かで満たすか、どちらかになるか、というのは、覚醒のゆるみが、下降的な陶酔になるか、上昇的な陶酔になるか、という分かれ道を描写しているようである。

3-3 霊媒における覚醒と陶酔

すでに見たように、ハクスリーは随所で「心霊」的なるものに接近し、スピリチュアリズムの霊媒についても触れながら、また心霊現象一般の事実性を

よく知っていないながら、その意義については、否定的である。心靈現象の一つの焦点である霊媒は、「入神霊媒 (trance medium)」という用語があるように、眠り込んで、死者と交流することが多いが、『永遠の哲学』からすれば、重要なのは「不死」であり、「死後の生」ではないからである。前者は、「神的な『根拠』の永遠なる今に参与すること」「神の『根拠』と同一であるオートマン」であり、後者は「いくつもある時間の一つにおいて存続すること」「私意識」にすぎない。²³

他方、ハクスリーを離れて、著名な霊媒の報告を見ると、つぎのような部分がある。「はじめのころは身体から二、三フィート離れたところに立っていたり、あるいは身体の上の方で宙ぶらりんの格好で自分の口から出る言葉を一語一語聞き取る (conscious) ことができた。……私自身にとつて入神 (trance) はいわば『心地よい降服 (surrender)』である。……意識が薄らいでいき、まわりのことが分からなくなり (loose awareness)、柔らかな毛布で包まれたみたいな感じになる。そしてついに『私』が消えてしまう (I have gone)」というものである。

この直前に、原文では興味深い一節があるのだが、邦訳では言葉を省略し、かつ意識しているので、内容がはつきりするようには拙訳すると、「霊がトランスを完全にコントロールするまでの遅々とした進歩について、バーバネル (霊媒) は、『霊によって語られていることをまったく自覚しなくなる (complete unawareness)』まで数年を要した」と述べている²⁴とある。

「自覚 (awareness) の程度、意識 (consciousness) の程度にはさまざまな段階がある」といわれた上で、特殊な役割を担う霊媒において、自覚や意識つまり「覚

醒」を失って、トランスつまり「陶酔」に至ることの重要性が強調されているのは、『永遠の哲学』では見ることのできない特徴である。スピリチュアリズムがもたらす、初歩的ながら実効的な英知に価値を認める初心者にとって、こうした意識論は、重要な意義をもっている。

ただし、一般人の地上生活に関して、「霊性 (spiritual nature) に気づいた人は……神性 (the divine) が目を覚ましたのです (awakened)」と、日常で高い意識状態に目覚めることが強調されているのは、『永遠の哲学』の日常版と通い合う表現である。技法面、現象面ではなく、思想面に注目してみても、「高等スピリチュアリズム」においては、『永遠の哲学』でいわれる究極の根拠とのつながりが、当然の前提とされており、これも共通する。しかしそれとの合一は「あまりに遠すぎる」ものとされ、この世の未熟な人間にとつては、成熟した霊による指導の必要性、その献身的な働きの重要性、実際の働きかけが、強調されるのである。²⁶

4 意識・存在・世界の多重性

陶酔と覚醒は、一つの意識層で、時間的に交替することもあり、複数の意識層を移動することで、いわば場所的に交替することもある。また、冒頭で「複数の意識層で、陶酔／覚醒が並行している」と述べたように、共存していることもあり、またそれに気づいていることもあり、気づいていないこともあるようである。

意識・存在・世界の相互依存関係と、それらの階層性、多重性は、「永遠の哲学」の公約数の一つであ

る。井筒俊彦の最も単純化した説明を借りれば、「表層意識に身を置く人」と、「深層意識に身を据えた人」があつて、それぞれの見る世界は違うが、「東洋的哲人」は、「深層意識と表層意識とを二つながら同時に機能させることによって、『存在』の無と有とをいわば二重写しに観る」ことができる²⁷となる。

意識・存在・世界の多重性の中で、陶酔と覚醒はどのようにからんでいるだろうか。実践と思索を編み合わせた本山博の証言からは、より大いなる存在・意識と一体化するときの一次的な「陶酔」と、自らが「場所」という世界になったときの「覚醒」、あるいはその間をつなぐ「覚醒」が、読み取れる。

本山は、意識・存在・世界の次元を五つ (物理的、アストラル、カラナ、プルシヤ、絶対無と、由来を異にするキーワードを組み合わせたもの) に区別して、その相互転換を考え、そのいずれにおいても、「宗教体験」は「三つの段階」を持つとした。

第一段階は、(その次元の)「利己的存在 (自我性) が全く否定」され、短時間、(上位の次元の) 超越者との「一致の恍惚状態」に留まるが、この「単純な一致」では、まだ「人間の意識は失われない」。

第二段階は、「超越者の個的存在への流入あるいは顕現が、全的に」起こり、「個はその意識、感覚、肉体における活動においては全く仮死状態」となる。この「意識してしたことではない……エクスタシー」体験のあと、体験の「記憶」が、「明瞭に意識の領域に上がってくる、そして初めから知っているようにも思われる」のは、「場所的な超越者の立場」に立っているからであり、「場所的存在となった個」は、体験後も「場所的存在」でありつづけ、「個」の意識は失われずに、「場所的意識」をもっている。

第三段階は「超越者」「神霊」との完全な一致であ